

Hello! FUJISEI

No.41

がんは、昭和56年から死因トップを続けています。速報値では、がんによる死亡者数は平成22年は35万人を超え、30年連続の第1位となっています。

しかし、診断と治療の進歩により、一部のがんでは早期発見、そして早期治療が可能となってきました。こうした医療技術に基づき、がんの死亡率を減少させることができる確実な方法として挙げられるのが「がん検診」です。

厚生労働省が発表した「平成21年度地域保健・健康増進事業報告の概況」によると、平成21年度に市区町村が実施したがん検診の受診率は、「胃がん」10.1%、「肺がん」17.8%、「大腸がん」16.5%、「子宮がん」21.0%、「乳がん」16.3%となっています。また、平成20年度に市区町村が実施したがん検診における要精密検査者のうち、「がんであった者のがん検診受診者に対する割合」は「乳がん」0.32%、「大腸がん」0.21%でした。

平成21年度の市区町村のがん検診受診率の分布をみると、「肺がん」は受診率の高い市区町村が多く、一方、「胃がん」は低い市区町村が多くなっています。

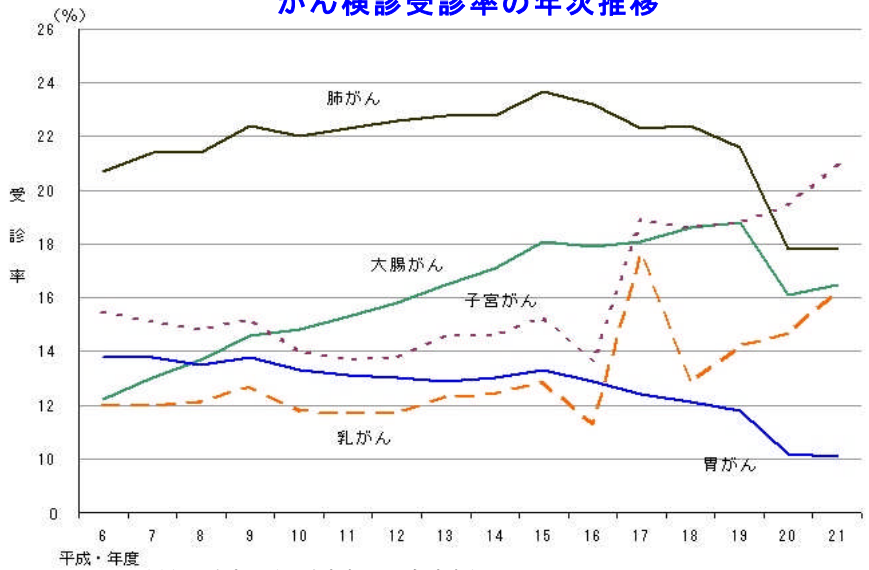
無症状のうちに「がん」を早期に

がん検診で死亡のリスクを軽減

無症状のうちに早期発見・治療できれば

発見し治療することが大切です。無症状の人には進行がんが少なく、早期のうちにがんを発見することができます。そのがんを治療することにより、がんによる死亡のリスクを軽減することができるからです。

がん検診受診率の年次推移

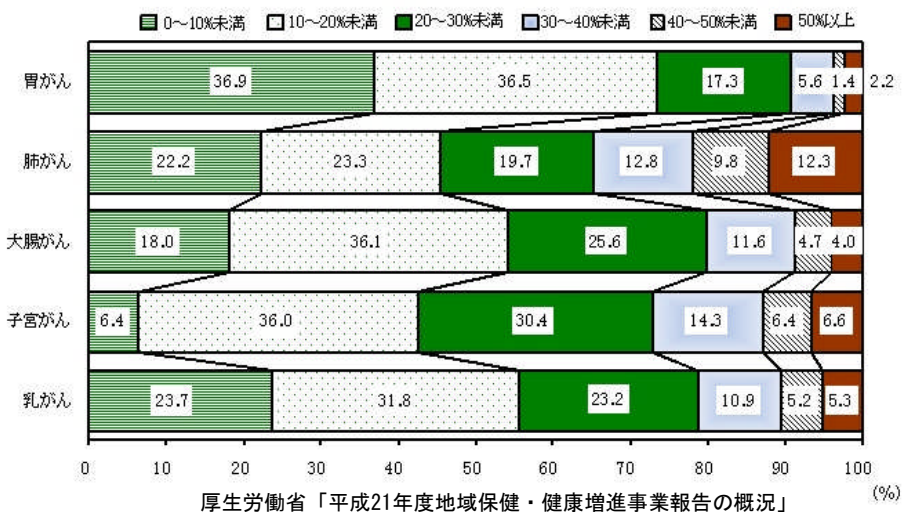


(注) 受診率 = (受診者数 / 対象者数) × 100

平成17年度から「子宮がん」「乳がん」の受診率の算出方法を変更。

平成18年度以降の「乳がん受診者数」については、視触診方式及びマンモグラフィの併用者を計上。

市区町村におけるがん検診受診率の分布状況



厚生労働省「平成21年度地域保健・健康増進事業報告の概況」

(%)